

§4-3. まとめ

1. 色彩と香りの感情次元

本実験の結果から、印象評定に対する因子分析の結果、主因子として<MILD>因子、<CLEAR>因子の2軸が抽出された。第2章において検討した色彩、香りの各々の感情次元として共通していた2因子と、構成項目も類似していたことから、組み合わせによる感情次元の特別な構造変化はないと考えられる。但し、<SIMPLE>因子、<ORDINARY>因子は、香りごとの比較で、いずれの香りでも有意差の得られた項目であり、色彩と香りの有意な交互作用が認められた項目であった。よって、本研究のような設定における特徴的な因子であったと思われる。これら2因子における交互作用の要因として、オリーブが嫌悪されやすい色であること、そして色彩による心理的「構え」が潜在的であることを指摘した。そして、<SIMPLE>、<ORDINARY>の2因子は、これらの要因によって評定に混乱が生じやすい因子であったと思われる。

2. 色彩と香りの調和による心理的効果

本研究では、色彩と香りを様々に組み合わせたが、まず調和性に着目し、香りごとに調和ペア、不調和ペア間の比較を試みた。印象評定結果においては、いずれの香りも有意差が認められ、調和ペアでは香り本来の印象が5色中最も顕著に表われる結果が得られた。それは、比較的単純な相乗的効果であった。印象評定においては、いくつかの項目で交互作用が確認されたが、調和による印象の変化がその要因となる可能性が示唆された。

一方、気分評定においては、嫌悪されやすいオリーブとの組み合わせ条件下で、5色中、最も快い気分がもたらされる場合があることが特筆すべき結果であった。それは、心理的「構え」が逆に作用した結果と考えられる。また、気分評定における色彩と香りの交互作用は確認されなかった。香りによる気分作用は、香りの好悪によるもの大きいと思われるが、それはビンの色彩によって大きく変化するものではないと予測される。

3. 色彩と香りの調和による心理的効果が生じるメカニズム

本実験の設定では、まず、ビンの中の色紙を知覚することで、心理的な「構え」(set)が生起すると思われる。それに対して、期待する香りが、類似の特徴を持つ調和香であり、期待とは異なる香りが不調和香と思われる。そして前者が提示された場合は、香りの認知がスムーズで、印象評定が安定することで、相乗的効果が得られたと考えられる。そしてこのことが、印象評定における色彩と香りの交互作用の要因となり得ることが示唆された。逆に、後者の場合、色彩の性質に引き寄せられることで、香りの印象評定に少なからず錯乱が発生することが考えられる。

また、本実験の手続きでは、色彩による心理的な「構え」は潜在的なものであると思われる。そのことに加え、オリーブのように嫌悪される色による「構え」は強いものと考えられる。このような場合、時として「構え」が逆に作用する可能性も示唆された。そしてそれは特に気分評定において多く観察された。

4. 本章の結論

色彩と香りの認知的交互作用に関する結論を、以下のようにまとめた。

- 1) ビンの中に挿入された色紙を知覚することで、心理的な「構え」(set)が生起すると思われる。
- 2) 「構え」に対して、期待する香りを嗅いだ場合(調和条件)、色彩と香りの印象における特徴が、相乗的により高められる傾向にあった。
- 3) 「構え」に対して、期待とは異なる香りを嗅いだ場合(不調和条件)、香りの印象は色彩に引き寄せられる傾向が観察された。
- 4) 色彩と香りの調和性が、印象評定における交互作用の要因となり得る可能性が示唆された。
- 5) オリーブは、香りの印象評定に混乱を生じさせる場合があり、それが交互作用の要因ともなり得ることが示唆された。
- 6) オリーブのように、色彩による「構え」が強く、潜在的であった場合、時として逆に作用する可能性が示唆された。
- 7) 6)のような傾向は、特に気分評定において多く観察された。
- 8) 色彩と香りの交互作用は、気分評定においては確認されなかった。